悪霊　第四部・荒れ野の花

【登場人物】

伊集院満枝……H市の地主の娘
猪俣佐和子……満枝の元クラスメイト。東京で左翼活動に従事。党員となる
増田小百合……旧姓・安西。伊集院満枝の一年後輩
佳代……貧しい農家の娘。党のハウスキーパー
喜代美……女工。党に派遣されモスクワに留学
李麗姫（イヨヒ）……女性抗日パルチザン
小沼健吾……労働運動家。伊集院家の元小作人
三沢……党中央委員
村野栄太郎……党員。マルクス主義研究者
大橋多喜蔵……党員。プロレタリア作家
増田喬……小百合の夫
磯田アヤノ……小百合の叔母
磯田幸吉……アヤノの夫。学校教師
悦子……アヤノの生徒。東京に家出する
加藤寅二郎……磯田幸吉の元教え子。脚本家
石原中佐……関東軍参謀

昭和六年（一九三一）年一月～十一月。モスクワ、間島、東京市、満州大連、弘前市

I

冷たい石の床に黒っぽい木製のテーブルが幾つか並べられ、中央には銀色のサモワール（茶沸かし器）が湯気を立てていた。壁の天井に近く、巨大なスターリンの肖像が掲げられている。外は雪が降り積もり、ガラス窓さえ凍りついていた。

一九三一年――日本で言えば昭和六年の年が明けてから十数日がすぎた午後、モスクワ郊外に建てられた極東労働者共産大学（クートヴェ）内の食堂に、一人の日本人女性が頬杖をつき、ロシア茶を飲みながら、分厚いロシア語の本を広げていた。頭が前後に揺れ、その眼は今にも閉じられそうだ。

「同志（タワーリシチ）ナージャ」

頭上から降ってきたロシア語に、ナージャと呼ばれた日本人女性――貴代美（きよみ）は、びくりと背筋を伸ばし、声の主を見上げ、にっこりと笑った。

声をかけてきたのは、ワルワーラ・イワーノヴナ。三十台半ばのロシア女性。この極東労働者共産大学（ズドウラーストヴヴィチェ）で東洋から来た留学生たちに、ロシア語を教えている。

「おはようございます。同志（タワーリシチ）ワルワーラ」

「おや、もう午後の二時ですよ。あなたは、今、ベッドから起きた気分なのですか？」

軽くからかわれ、貴代美は相好（そうごう）を崩して頭をかいた。

日本とソビエト連邦の間には国交が結ばれていたが、両国民が自由に往来できる体制にはない。

したがって、モスクワにいる日本人は、外交官をのぞけば、すべて「党」が送り込んだ密出国者たちだった。彼らは、この極東労働者共産大学で、一～二年講義を受ける。その内容は、マルクス主義理論、近代社会主義運動史といった学術的なものから、射撃やスパイ術等の実践的なものにまで及ぶ。学生の出身国は、日本、支那、朝鮮、台湾、ベトナム、タイなど様々だ。

毎年、十人前後の日本人が留学していた。ほとんどは、帝国大学を出たインテリたちだが、最近は労働者階級出身者も混じるようになった。

貴代美のモスクワ留学を後押ししたのは、小沼健吾（こぬまけんご）である。「党」は学歴を重んじる。帝国大学出身者でなければ幹部にはなれない。労働者階級出身者が党内で出世する唯一の抜け道が、モスクワ留学なのだ。

貴代美は、理論には弱いが、直感にすぐれ、人望がある。信念を貫く強さも持っている。観念的なインテリに牛耳られたままでは、いずれ「党」は行き詰る。本当に必要なのは、貴代美のような人材だ、と小沼は信じていた。

神戸から船に乗り上海へ、その地でソ連への入国手続きを済ませると、船でウラジオストックへ、シベリア鉄道で二週間かけてモスクワに入る。貴代美の肩書きは、国際労働者会議の日本代表団だった。会議は終わった後もモスクワに留まり、昨年の十一月、極東労働者共産大学に入学し、「ナージャ」というロシア名を与えられた。

「学校には慣れましたか？」

サモワールからお茶をつぎ、向かい合って座ったワルワーラの問いに、貴代美はまた頭をかいた。

「生活には慣れましたが、授業が難しくて大変です」

流暢なロシア語が、貴代美の赤い唇から流れ出た。

「私は、授業中に眠くなる悪癖があります。これさえなければ、もっと勉強も進むのですが」

ワルワーラは笑い出し、貴代美の肩を叩いた。

「気に病む必要はありません。あなたは、これまでここで学んだ日本人の中で、ロシア語の習得にかけては一番なのですから」

お世辞ではなかった。言葉だけでなく、ロシア料理にも、生活風習にも、貴代美はすぐに慣れた。他の日本人留学生が米の飯を懐かしがるなか、ロシアの黒パンと酸味のあるスープを、おいしそうにたいらげる。

「そういえば、同志ナージャ」

ワルワーラは声を潜めた。

「あなたの同室者は、朝鮮からの留学生でしたね」

「はい（ダー）」

「彼女とは、会話をかわせますか」

「彼女は日本語を話せますし、簡単なロシア語も通じます」

「わかりました」

ワルワーラは茶を飲み干して立ち上がった。

「なるべく、彼女と仲良くなりなさい。生まれや育ち、交友関係などを知って、より深く交流するべきでしょう」

極東労働者共産大学の学生は、すべて寄宿舎で暮らしている。二人にひとつずつ部屋を与えられた。貴代美と同室の朝鮮人女性は、「スヴェトラーナ」というロシア名を与えられている。ワルワーラに言われるまでもなく、すでに貴代美はスヴェトラーナとは仲が良かった。

ただ、留学生たちが自分の素性を明かすことは滅多にない。日本人同士でさえ本名を明かさず、あからさまな接触は避けている。学生食堂で昼食をとる時も、互いに談笑しあうこともない。貴代美はそれを不審に思うことはなかった。そういうものだろうと割り切っていた。

その日の夜、夕食を終えて部屋に戻ると、髪をおさげにしたスヴェトラーナが本を読んでいた。

「明日は軍事訓練だねエ」

自分の机に座って本を開きながら、貴代美は日本語で声をかけた。

「助かるよ、眠らずにすみそう」

スヴェトラーナが手を叩いて笑った。貴代美は頭をかいた。スヴェトラーナは本を閉じて貴代美に向かい、口を開いた。

「軍事訓練、一体何するかね」

「射撃とか格闘じゃないかエ？」

「私、それ、苦手。ナージャ、あなたは、どう？」

「射撃はやったことないけど、喧嘩なら男にだって負けないよ」

「ほんとか？」

目を見張るスヴェトラーナに、貴代美は得意げに言った。

「だって、きんたまを蹴ってやれば、男なんて簡単にやっつけられるもン」

「きんたま……？」

貴代美は笑って足をのばし、スヴェトラーナの股間をつついた。スヴェトラーナは腹を抱えて笑った。

「それ、私、知ってる」

「スヴェトラーナもやったことあるンだ？」

「私、しない。妹が得意だった」

「妹がいるンだね」

「はい。朝鮮に住んでる。テコンドー知ってるか？」

「知らない」

「朝鮮の武術。妹、とても強い。名人」

「妹さんは、今、何をしているの？」

スヴェトラーナは口を噤んだ。貴代美は慌てた。言いたくないなら、言わなくていいンだよ、と付け加えたが、スヴェトラーナは面差しを悲しげに歪め、言った。

「妹、たたかってる」

「誰と？」

「父。父は私と妹の敵」

「敵？」

「父、イルチンフェ」

「イルチンフェ？」
スヴェトラーナのたどたどしい日本語での説明によると、イルチンフェは漢字で「一進会」と書く。朝鮮の親日派団体である。日本が朝鮮を植民地にしたとき、内部から協力した。スヴェトラーナの父は親日派の警察官僚で、植民地化に抵抗する同胞を弾圧した。
スヴェトラーナと妹は、そんな父に反発し、家を飛び出した。スヴェトラーナは朝鮮労働党に入り、妹は抗日武装闘争に身を投じた。
「私、いずれ朝鮮に帰り、妹と力合わせ、日本人を追い出す。父も許さない」
拳を握りしめ、唇を震わせるスヴェトラーナを、貴代美は驚いたように見つめていた。
その翌日。
学生食堂で睡魔とたたかいながら勉強していた貴代美に、ワルワーラが声をかけてきた。ロシア茶を飲みながら、昨夜、スヴェトラーナに聞いた話を、ワルワーラに告げた。
「そう……」
興味深げに聞いていたワルワーラの表情に、特に変わった色は浮かばなかった。
その翌日。授業を終えて寄宿舎に戻ると、部屋に、スヴェトラーナの姿はなかった。彼女の荷物もすべて無くなっている。戸惑ったが、ここでは教授も学生も、不意に現れ、不意に姿を消す。いちいち理由を公表はしない。そういうものなのだろう、と貴代美は納得していた。他の留学生たちも、特に変わった様子もなく淡々と過ごしていた。ただ、一部の朝鮮人留学生たちは、明らかに動揺と不安を隠せないようであった。
その一ヵ月後。

モスクワ、ルビャンカ広場に面したソ連国家保安委員会（ゲーペーウー）の監獄で、憔悴しきったスヴェトラーナ――本名・李麗華（イヨファ）に、判決が下された。
同人は、朝鮮内で親日的活動を行う父を助ける目的で、思想を偽って朝鮮労働党に入党。モスクワ留学を志願して実現。ソ連国内の諸情報を集めて父親に送ると同時に、数々の卑劣な破壊活動を行った。その罪により、二十五年の強制労働を課すものとする。
当時、強圧的な独裁政治でおびただしい人々を死に追いやったスターリンは、こう述べている。
……愛とか友情などというものはすぐに壊れるが、恐怖は長続きする。

その頃……。
全長五千キロの大河・豆満江（とまんこう）は、朝鮮と支那との国境を流れている。その流域に、人口五万人ほどの小さな都市があった。かつては大韓帝国が、今は大日本帝国が領有するその地に、数百人の日本軍兵士が駐屯していた。
もともとこの地域は、日本と支那との間でその領有をめぐって争いが絶えない。さらに、支那側は古来から朝鮮族が数多く住んでいたため、日本の植民地支配に抵抗する勢力――いわゆる抗日パルチザンの根拠地となっていた。
彼らは折を見て豆満江を越えて朝鮮側に出没し、日本人警官や兵士、彼らに協力する朝鮮人を血祭りにあげた。襲撃が終わると再び豆満江を渡って支那側に逃げるので、手が出せない。朝鮮総督府は事態を重く見て兵力を増員した。川のほとりには、随所に屯所が設けられ、常に十人程の兵士が詰め、交代で昼夜を問わず警戒に当たったが、効果は少なかった。

冬の風がやかましく響く、寒い夜。
屯所の外の川縁に、二人の日本兵が銃剣を構えて川向こうを睨んで立っていた。東北の寒村から徴兵された彼らは、入営以来の厳しい訓練によって、兵士としての心構えを叩き込まれていた。即ち、上官の命令には絶対服従すること。命令には疑いを一切持たないこと。自己の欲望や感情を捨て、命令を遂行する機械となること……。
目の前の大河の向こう岸には、光輝ある大日本帝国の皇恩を有りがたがらず、武器を持って反抗する不逞の輩が蠢いている。彼らは敵であり、躊躇うことなく抹殺すべき存在であった。彼らは川を渡ってやってくる。となれば、ひたすら川を見張るべきであり、視線を逸らしてはならない。
彼らは、その「敵」が、背後から足音を忍ばせてやってくることに気づかなかった。「敵」が、警戒の手薄な一キロ先から岸にあがり、迂回してやってきたことを知らない。
一人の日本兵のすぐ背後に立った「敵」は、いきなり右足を跳ね上げた。爪先はあやまたず日本兵の股間を直撃した。兵は呻き、股間を両手で押さえてうずくまった。
もう一人の日本兵が、戦友の呻きに気づいて振り向いた時、「敵」はすでに、彼の目の前に迫っていた。叫びをあげる暇も、銃の引き金をひく暇も与えられなかった。「敵」の膝が彼の睾丸を蹴り上げた。睾丸は「敵」の膝と己の腰骨との間でひしゃげ、想像を絶する激痛を生ぜしめた。
河原の転がって悶絶し、生物的な恐怖と苦痛に顔を歪める日本兵たちを、「敵」は冷ややかに見下ろしながら、呟いた。
「金日成将軍万歳……」

か細い、女の声だった。
この地で唯一の高級ホテルのロビーは、朝になると、滞在する日本人たちの情報交換の場となる。二人の日本人がソファに背を沈め、談笑していた。
「また昨日、日本兵が殺されたようだね」
煙草を吹かしながら、眼鏡をかけたジャーナリストが言った。
「抗日パルチザンの仕業ですか？」
材木の仕入れに来ている商社員が不安げに訊ねる。
「おそらくね……屯所に詰めていた十人、皆殺しだそうだ。しかも、殺され方が尋常じゃない」
ジャーナリストは声をひそめた。
「睾丸を潰され、なにを切り取られて口に突っ込まれていたそうだ」
商社員は青ざめた。
「残虐だなあ。実に非文明的だ……」
ため息をつく商社員に、ジャーナリストは付け加えた。
「それがあいつらのやり口だよ。男なら誰だって、あれを去勢されるのは怖い。日本の警察や軍隊を怯えさせ、士気を低下させようというのだろう。大和魂をなめとるね。ただ……」
ジャーナリストは周りを見回し、商社員を覗き込むようにして言った。
「あるところで聞いたのだが、連中は、同じやり口を仲間にも適用するらしくてね、山中で、パルチザン兵士の死体が、同じ状態で見つかることがあるんだそうだ」

「仲間をですか？」
「ああ、裏切り者を処刑するのに、そうするらしい」
「まったく非人間的だ」
商社員は頭を抱えるようにして言った。
「明日は山奥の村まで買い付けの視察だというのに、大丈夫かなあ……いったい、軍隊は何をしてるんでしょうね。さっさと奴らの根城を攻撃し、皆殺しにしてやればいいんだ」
商社員の愚痴に、ジャーナリストは笑った。
「その抗日パルチザンに武器や食糧を売りつける日本人もいるという噂だからねえ。あんたら商売人は、ほんとうに逞しいよ」
うちは、そんな売国的行為はしませんよ、と口を尖らせる商社員と背中合わせに、ひとりソファに座って新聞を読む一人の女性がいた。
伊集院満枝だった。

川奈産業の社長である川奈昭一郎の睾丸を破裂させ、その株を買い取り、同社を事実上乗っ取った伊集院満枝が、この危険な国境地域に姿を現した理由は、さて措くとしよう。
やがてジャーナリストも商社員も席を立ち、広いロビーに座っているのは満枝ひとりとなった。
黒っぽいスーツにスカート姿の満枝は、膝に地図を広げ、ところどころに鉛筆で印をつけていた。十二月十五日（三人、兵士）、一月六日（二人、警察官）というふうに。
どうやら、抗日パルチザンが日本の軍人や警官を襲撃した日付と、犠牲者の数を記入している

らしい。
「何か分かりましたか？」
近寄って声をかけてきたのは、ハンチングスタイルの西洋人だった。
「Good morinig Mr.Jones」
満枝はにっこりと微笑んで立ち上がり、手を差し出した。ジョーンズと呼ばれた三十すぎのアメリカ人は、握手を返し、地図を覗き込む。
「これは？」
「パルチザンがこの付近を襲撃した場所と日付です」
「何か、彼らの襲撃に一定の法則を見出そうと？」
「ええ」
「その法則を把握できましたか？」
「いいえ、まったく」
満枝は平然と笑顔で返した。
「無計画で無謀な組織だということは、よく分かりました」
ジョーンズは笑い、それから声を低め、満枝の耳元で囁いた。
「将軍に会えそうです」
「あら」
満枝は眼を見開いた。「将軍」とは、抗日パルチザン組織の指導者のこと。名は知れ渡っているが、その正体は謎に包まれている。通信社の特派員としてこの地に派遣されているジョーンズ

は、前々から、「将軍」へのインタビューでスクープを狙っていた。
「すばらしい知らせです。おめでとうございます」
「Thank you」
西洋人らしく折り目正しいお辞儀で祝意に応えた後、ジョーンズは言った。
「当然、同行を希望されますね」
「ええ」
「では、私のアシスタントということで、先方に話を通しておきます。日時が決まったら、すぐに連絡します」
再び握手をかわして別れた。ジョーンズは大股にホテルの玄関へと消えた。

数日後の夜。
朝鮮半島の冬は厳しい。吐く息が白く凍りそうだった。
頭にマフラーを巻きつけ、ニッカポッカーに分厚い外套を羽織ったジョーンズと満枝は、町外れの、滔々と流れる豆満江のほとりに立っていた。ここで抗日パルチザンの連絡役と落ちあい、「将軍」の居場所まで案内される手はずになっている。
身を切るような寒さのなか、伊集院満枝は微動だにせず、闇の向こうを流る大河を見つめていた。
「あなたは、実にタフだ」
ジョーンズは感に堪えたような声を出した。

「とても辛抱強い」
「アメリカ人男性の良さは、私のような女性も、すぐに誉めるところです」
満枝は応えた。
「日本の男性は、滅多にそんなことはしません」
「なぜでしょう？」
「女性を誉めることは、自らの地位を貶めるものと信じているのです」
「あなたは、自国の男性が嫌いなのですか？」
満枝は微笑み、言った。
「率直なところも、アメリカ人の美点です」
ジョーンズは肩をすくめ、あ、と小さく叫んだ。
暗い川面にぽつんと浮かび上がった光点が、次第に近づきつつあった。抗日パルチザンの船に違いない。ここで船に乗って対岸に渡り、そこから陸路、「将軍」のいる根拠地まで歩くものとされていた。
やがて、小さなジャンク（木造帆船）が姿を現した。ジョーンズは手にしたランプをゆっくりと振った。
ジャンクには、粗末なカーキ色の綿入れに身を包んだパルチザン兵士が三人乗り込んでいた。そのうち一人が河原に降り立ち、近寄ってくる。
「ミスター・ジョーンズか？」
なまりの強い英語の声は、女性のものだった。小柄で、身の丈は五尺（約一五〇センチ）に満

たない。
「そうだ。彼女はミス・イジューイン」
満枝はマフラーを取り、丁寧にお辞儀をした。女性パルチザンは言った。
「日本人か？」
朝鮮訛りの強い日本語だった。満枝は頷いた。女性パルチザンは唇をかすかに歪め、それから英語でジョーンズに言った。
「残念だが、将軍はあなたたちに会えなくなった」
「なんだって？」
両手を大きく広げて驚きを表すジョーンズに、女性パルチザンは、理由は言えない、とのみ答え、背を向けて歩き出した。ジョーンズはその後を追いかけ、ジャンクの船べりに手をかけて食い下がったが、女性パルチザンは無言で手を振り拒絶するばかりである。
「十二月十五日に三人！」
満枝が日本語で叫んだ。ジョーンズと女性パルチザンが、言い争いをやめて満枝を見た。
「一月六日に二人！……そして昨夜は十人！」
女性パルチザンがゆっくりと満枝に歩み寄った。日本語の通じないジョーンズは困惑して見つめるばかりだった。満枝は静かに言った。
「日本兵の睾丸を潰して殺したのは、あなたなのでしょう？」
女性パルチザンは、しばらく満枝を凝視し、やがて笑い出した。そのまま満枝に背を向け、ジャンクへと向かい、ジョーンズとすれ違い際に、何かを耳打ちした。

「Wow!」
ジョーンズは両手を打ち合わせて小躍りし、満枝に駆け寄った。その背後で、ジャンクがゆっくりと河辺を離れていった。
「ミス・イジューイン、貴女はどんな魔法を使ったのです？」
「魔法？」
「彼女は私にこう言いました。三日後の同じ時刻に、この場所で、自分がインタビューを受ける。あの日本人女性にも、ぜひ同席してほしい、と」
満枝は小首を傾げ、訝しげな面持ちを作った。
「あの女性は、インタビューするに値する人物なのですか？」
「大スクープです。彼女は、有名な女性パルチザンですよ」
ジョーンズは興奮していた。
「本名は李麗姫（イヨヒ）。ソウルの名家の生まれで、父親は悪名高い親日家ですが、家出して抗日闘争に身を投じた勇敢な女性です。格闘の名人で、日本の兵士や警官を殺害しているのも彼女だという噂がある。確か姉も社会主義組織のメンバーだとか……」
「女性なのに、とてつもない人なのですね」
「ミス・イジューイン、プリーズ」
ジョーンズは両手を合わせて懇願した。
「彼女とのインタビューが終わるまで、この地に留まってくれませんか？」
「Off course」

満枝は即答した。
「もとより、そのつもりです。エキサイティングな経験になりそうですわね」

三日後の夜。
伊集院満枝とジョーンズは、同じ場所で女性パルチザンの李麗姫が現れるのを待っていた。
「なかなか来ませんね」
外套の胸元をかきあわせながら、ジョーンズは言った。
「彼らとつきあう上で欠かせないのは忍耐力です。私は慣れているが、ミス・イジューイン、寒くてたまらないのではありませんか？」
「平気です」
満枝は笑顔で答えた。
「寒いところに生まれましたから」
「日本の北部でしたね。どのようなところですか？」
「退屈な街です」
「では、あなたも刺激を求めて、この地に来たわけですね？」
「刺激は、自分から作り出すもの。私がこの地に来たのは、学びたかったからです」
「何を？」
「人間と言う存在を」
満枝はジョーンズに背を向け、暗く流れる川面を見つめた。

「人間は、その本質が善なのか悪なのか……。シェイクスピアは、きれいなものは汚く、汚いものはきれいだと言いましたけれど、おそらく善と悪とは渾然一体のもの。少なくとも、人と人とが殺しあう今の時代を見れば、純粋な善とは言いがたいことは事実です」
「あなたは、なかなかの哲学者ですね」
ジョーンズは眼を丸くして言った。
「あなたの言葉を借りれば、私は、人と人とが殺しあう風景を実際に見たい。それでこの地へ来たことになる」
「殺しあうにも、いろいろとあります」
満枝は、川面を見つめ続けながら言った。
「戦争ならば、理解できなくもありません。敵から身を守るのは、生物としての本能でしょう。でも一方で、本来は味方であるべき同胞をも敵と見なし、彼らを恐怖に陥れ、時には命を奪う。これも人間の本能なのでしょうか」
「それは……具体的には？」
「この地の抗日パルチザンが、敵である日本人を殺すのは、日本人である私にも分かります。でも、聞くところによると、パルチザンは味方にも同じ事をするそうですね。日本人にするのと同様の残虐なやり口で、去勢した挙句に殺す。それはなんのためでしょう」
「殺された連中は、スパイか裏切り者だったからでは？」
「それだけでしょうか？」
満枝の白い顔が紅潮し、眼に光がともった。

「おそらく、それは彼らなりの支配の法則なのだと思います。恐怖で人を縛る。そのやり方が有効なのであれば、将来、恐怖政治は世界のあらゆる場所に広がっていくでしょう。その恐怖が世界の大部分を覆った時、何が起こるのか。そうなった時、私の目の前にどんな風景が広がっているのか……。私は、それを早く見たいのかもしれません」

背後でどさっと重い音が響いた。

振り向くと、ジョーンズが仰向けに倒れていた。その喉がぱっくりと横一文字に開き、鮮血を吹き上げている。

屍となったジョーンズの傍らに立っていたのは、女性パルチザンの李麗姫であった。右手に血の滴るナイフを、左手に拳銃を構え、その銃口は伊集院満枝に向けられていた。

「なぜ、去勢なさらなかったの？」

銃口を向けられながら動揺したふうも見せず、ジョーンズの死体を一瞥してから、満枝は静かに訊ねた。

「彼、アメリカ人」

李麗姫は答えた。

「苦しめて死なせる必要、ない」

「では、わたくしも苦しまずに、楽に死ねるのかしら」

「私、お前を殺す。でも、その前に聞くこと、ある」

麗姫は拳銃を構えたままゆっくりと歩み寄り、銃口を満枝の額に当てた。

「お前、なぜ、私を探す？」

「あなたを？」

「隠す、無駄。私、知ってる。お前、一ヵ月前、ここに来た。ずっと私を探してた。私と会うため、このアメリカ人と仲良くなった。なぜだ？」

「この一ヵ月、わたくしを見張ってらしたわけね」

「答えろ」

「どうせ殺されるのでしょう。答える気にはなれないわ」

満枝は微笑み、一歩さがった。麗姫がそれに合わせて前に出ようとした時、満枝は踵を返して歩き出した。

引き金に指をかけたまま拳銃を擬する麗姫に背を向け、満枝は続けた。

「わたくしが興味があるのは、あなたの手口よ。睾丸を破裂させ、男根を切り取って喉に詰め、窒息死させる……男性にとっては、いちばん苦しみが多く、いちばん屈辱的な殺され方でしょうね。さすがのわたくしも、男根を切って喉に詰めるところまでは思いも及ばなかったわ」

「お前……」

麗姫は言った。わずかに声が震えていた。

「お前、男の睾丸を潰したこと……」

「あるわ」

「何人？」

「数えたことなんかないわ。ともかく、わたくしは、そんな残忍な手口で、敵どころか味方まで

殺しているあなたに会いたくなったの」
麗姫の面差しが怪訝そうにゆがんだ。
「あなたを突き動かしているのは何か。憎しみか、悲しみか、それとも快楽を得るためか……それを知りたくなったのよ」
満枝は再び、麗姫に向き直り、外套のポケットに手を突っ込んだ。麗姫が引き金にかけた指が、反射的に力が入る。
「撃ったら、日本兵が駆けつけるわよ」
満枝の声に制され、麗姫は引き金から指を離した。
「五百メートル先に、日本兵が十数人、詰めているわ。機関銃も用意している。いくらあなたでも、独りで相手をするのは無理」
眼を開いて凝視する麗姫に、満枝はポケットから取り出した紙片を差し出した。紙片と満枝の顔を交互に見る麗姫に、満枝は説明した。
「わたくしの名前と住所よ」
その紙片を足元に置き、満枝はゆっくりと後ずさった。
「いずれあなたは、わたくしを頼ることになるわ」
「なに？」
「考えてごらんなさい。あなたは優秀なパルチザン。今は、上の人もあなたを重宝（ちょうほう）している。でも、平気で男を去勢して殺すような女を、男が許すわけないもの。それは社会主義者であれ、帝国主義者であれ、変わらないわ」

「……」
「あなたはいずれ、粛清されることになるでしょうね」
「何言うか！」
「むざむざ粛清されるあなたではないでしょう。でも、パルチザン仲間から去ってしまえば、あなたには居場所がない。逃げ回る生活がいつまで続くか……その時こそ、わたくしのところに来て、わたくしに力を貸してほしいの？」
「力を……？」
「あなたは、この地で日本の支配に抵抗している。わたくしはいずれ、日本を内側から壊していくつもりよ」
呆然と言葉もない麗姫に、満枝は深々とお辞儀をした。
「今夜は、ここでお暇（いとま）するわ。いずれ再会のときまで、ごきげんよう」
満枝は闇のなかに消えた。
拳銃を構えたまま立ち尽くしていた麗姫は、やがて苦笑いを浮かべ、ナイフと銃をしまい、満枝が置いていった紙片を拾った。しばし眺めた後、紙片を畳んでポケットに入れながら呟（つぶや）いた。
「お許しを……あの日本女に丸め込まれたわけではありません」
そして小さく付け加えた。
「……金日成（キムイルスン）将軍万歳（チャングンマンセー）……」
この当時、支那と朝鮮との国境地帯で抗日武装闘争を展開していたパルチザンの指導者を、朝

鮮の人々は「金日成将軍」と呼び、秘かに敬慕していた。後の朝鮮民主主義人民共和国国家主席と同一人物であったかどうかは不明である。